



国内初の世界自然遺産・屋久島の現状

地域と共生する エコツーリズムを目指して

屋久島
Yakushima

鹿児島空港から飛行機で約30分。周囲130kmほどの屋久島は、東北の白神山地とともに1993年12月に日本で初めて世界自然遺産に登録された地域です。海岸部と山岳部の標高差が2,000m近くあり、独特な生態系が見られ、トレッキングや登山、カヌーなどのエコツアーも盛んで、ガイドセミナー講演会や研修会など、エコツーリズムを支援するさまざまな取り組みもなされてきました。

世界遺産登録から10年を経過し、国内のエコツーリズム先進地である屋久島を訪ねました。



屋久島の魅力と屋久島環境文化村構想

屋久島は、北に上屋久町、南に屋久町と、共に人口7,000人弱の二つの町で構成されているほぼ円形の島です。屋久島は、一般に樹齢500年ほどといわれている杉の日本の南限で、樹齢2,000年、3,000年といった長寿の杉が多く残されています。これは、年間4,000～10,000mmもの多雨に恵まれている特殊な自然環境と、^{※1}屋久杉の樹脂の特性が起因しています。屋久島は花崗岩で栄養分が少ない土地柄のため、杉の生長が遅く、年輪の幅が緻密になり、硬い材となって普通の杉の6倍もの樹脂がたまるのです。この樹脂は防腐・防菌・防虫効果があり、長く生き続けられるのだといえます。

このように屋久島は日本特有の優れた杉の生育地であり、標高差によって南から北の植物へと連続的に変化する植生の垂直分布が見られること、照葉樹林が広範囲に原生状態で残されていることなどが評価され、島の約20%が世界遺産に登録されたのです。

屋久杉はその昔、神木としてあがめられ、伐採されることはなかったのですが、江戸時代になると森林の50～70%が伐採、明治時代には森の大部分が国有化され、昭和40年代の高度経済成長期に大規模な伐採が行われました。しかし、'71年に大規模伐採の中止を求めて「屋久島を守る会」が結成され、また上屋久町でも「林地活用計画」をまとめるなど、地元の働きかけで屋久杉の保全が図られるようになったのです。

'90年になると、鹿児島県が鹿児島県総合基本計画に「屋久島環境文化村構想」を戦略プロジェクトに位置付けます。翌年4月、県は「日本の屋久島」・「世界の屋久島」という視点から計画の理念を検討するため、日本を代表する知識人による「屋久島環境文化懇談会」を設置。一方、地元の有識者による「屋

久島環境文化村研究会」も設置され、両会による意見交換が行われました。世界遺産への登録は、屋久島環境文化懇談会の委員のアイデアでした。日本の世界遺産条約批准は'92年で、当初は地元も「世界遺産って何？」といった様子だったといえます。同年9月に政府は屋久島を世界遺産に推薦することを決定し、その2カ月後の11月に県は'92年屋久島環境文化村構想マスタープランを発表しています。

同構想では、屋久島の自然・文化の価値や個性を見据え、「自然環境の保護と地域振興の同時解決をめざす」こと、「その根拠を、屋久島の自然の傑出性と歴史的に形成されてきた自然と人とのかかわり（環境文化）に求め」、「環境文化村は、自然と共生する新しい地域づくりをめざす試み」と、基本理念を打ち出しています。この基本理念のもと、環境文化村として、環境学習・研修施設の整備、環境形成事業の展開、ボランティア協力事業の推進、新たな地域産業の創出、国際的な交流の展開の五つを事業の柱としています。

世界自然遺産への登録は、屋久島環境文化村構想を推進する大きなステップとなりました。また、'01～'10年度の県政の基本計画である「21世紀新かごしま総合計画」にも同構想が主要プロジェクトに位置付けられています。

そして、'93年には構想を推進するため、鹿児島県、上屋久町、屋久町によって財団法人屋久島環境文化財団が設立されました。同財団では、総合的な



'93年3月にまとめられた「屋久島環境文化村マスタープラン」の報告書概要版

※1 屋久杉
樹齢1,000年以上の杉を
屋久杉といい、1,000年
未満のものを小杉と呼ぶ。

交流案内機能を持つ「屋久島環境文化村センター」と、環境学習の研修・宿泊施設である「屋久島環境文化研修センター」の環境学習中核施設の管理運営のほか、環境学習プログラムの企画立案や機関誌の発行、環境保全活動の普及・啓発などの事業を行っています。

屋久島におけるエコツーリズムの現状と課題

屋久島環境文化村構想では自然体験型観光「エコツアー」の開発について「屋久島でのエコツアーは、人々が生活のなかで自然を利活用してきた長い歴史を踏まえ、島の生活の成り立ちや空間を体験することによって、自然について深く学ぶとともに、人と自然の持続的な共存の在り方を学び、その過程を楽しむものです。こうした視点のもとにプログラムの開発、ガイドの養成、利用者の誘致を進め、新たな地域産業としての育成を図ります」と規定しています。屋久島の地域づくりは、生活、産業、文化などのあらゆる面で、特徴ある自然環境とのかかわりのなかで進められ、観光産業は最も将来性のある産業として、「自然体験型のエコツアーを中心に観光産業の発展を図ることが、自然環境の保護・保全が図

られるとともに、経済波及効果により他の産業の活性化にもつながる」との観点で、エコツーリズムの重要性が認識されています。

屋久島では、樹齢7,200年ともいわれる縄文杉を訪ねるトレッキングや標高800mの白谷川流域に広がる白谷雲水峡ハイキング、宮之浦岳登山など、ガイドとともに楽しむエコツアーが盛んです。エコツアーで最も重要な役目を果たすのが、インタープリター（自然解説者）となるガイドですが、現在屋久島でエコツアーガイドとして活動する人は100名ほどといわれています。世界遺産登録後、外からの移入者ガイドも増え、ツアーガイド料が10,000円のツアーも多くあり、ガイド業のみで生計を立てている人も少なくありません。しかし、さまざまなガイドがいることも事実で、ガイドの質や料金の違いなど、観光客からの苦情が寄せられるようになり、課題も見られるようになってきました。屋久島では、屋久島ガイド連絡協議会が設立されていますが、こうした問題を積極的に解決することも難しい状況にありました。また、観光協会内にガイドの登録制度はあるものの、2年以上の実績、2年以上の住民登録などの条件があり、ガイド紹介の機能が中心だったため、問題解決につながる動きは見られなかったようです。

さらに、観光客の要望や事業利益を重視するためか、屋久杉を見るツアーなどは「山の奥へ、奥へ」という傾向も見られるようになり、自然への負荷が心配されるようになっていました。

こうした状況を踏まえて、財団ではガイドセミナーの実施に加えて、'02年9月～'03年10月に島内の関係機関・団体が一堂に会した「エコツーリズム支援会議」を開催し、将来像の共通理解や課題の認識などに務め、昨年10月に「屋久島エコツーリズム推進のための指針及び提案等」を取りまとめています。ここでは、屋久島エコツーリズムの指針として、自



上屋久町にある「屋久島環境文化村センター」は屋久島に関する総合的な情報の提供、交流、案内の拠点施設。



屋久島にある「屋久島環境文化研修センター」は、屋久島をフィールドとした環境学習のための宿泊研修施設。

然・文化・環境保全のための指針だけでなく、エコツーリズムは「地域づくりの役割があることを理解する」といった島民のための指針、さらに「自然や歴史、文化等について事前に学習する」という来島者のための指針も盛り込まれています。このなかには「屋久島エコツーリズムへの提案」(表1参照)として、エコツアー企画者からガイド、交通機関や宿泊施設、飲食提供施設などの観光業者のみならず、農業、漁業、林業、商工業、民間団体、行政機関など、さまざまな立場の人々に対する提案もまとめられました。

エコツーリズムとは、ある一部の人々のみがかかわるものでなく、地域全体、産業全体がかかわるものであり、地域の人々がいかにそれを受け止めて持続的なものとして定着させることができるのかが重要な鍵といえるのです。

財団が設置したエコツーリズム支援会議は環境省が設置した「屋久島エコツーリズム推進検討会」と共同開催されており、こうした屋久島での取り組みは、今後の日本のエコツーリズムにとっても貴重な経験であるといえます。

ガイドの質を高めるために

先のエコツーリズム支援会議では、屋久島エコツアーガイドに求められる基礎知識を 自然環境に関する知識、 歴史、産業、伝統文化等に関する知識、 野外活動の技術、安全管理、法律、 顧客(来島者)とのコミュニケーション等の知識の四つに分類しています。屋久島のエコツアーガイドは、山岳、森歩き、沢登り、カヌー、ダイビングなど多様な上、



表1 屋久島エコツーリズムへの提案

1.エコツアー企画者への提案

来島者への情報提供
自然や歴史、文化に親しみ、環境保護につながる 旅行の企画
エコツアー利用地域の分散
伝統文化や郷土芸能への体験、参加
行政機関や環境学習関連施設、民間団体等との連携
屋久島の産業育成と 島民との交流促進
来島者からの感想や意見収集・活用

2.エコツアーガイドへの提案

自然、歴史・文化、安全管理などに対する基礎知識の理解促進
自己研鑽・研修会等の活用による知識、技術、経験の向上、蓄積
自然環境の利用状況調査、モニタリング及び自然保護や環境保全への協力
来島者のニーズの把握と 触れ合いの重視、感想や意見の収集・活用
屋久島独自のエコツアー・プログラムの研究・開発
諸々の地場産業と連携したエコツアー・プログラムの研究・開発
屋久島独自のガイド登録・認定制度

3.観光業への提案

自然に対する知識、文化や歴史に関する知識の理解促進
来島者に対し、環境の保護・保全の重要性についての指導
関係機関が開催する研修の積極的受講
屋久島の食材を活かした郷土料理の研究、特産品の紹介・提供
観光や環境学習に関する機関・団体との連携強化や情報の収集、発信
屋久島の交通体系の在り方について研究
宿泊関係者における屋久島らしさの追求、こだわり
飲食店も独自メニューを作る

4.農業、漁業、林業への提案

農業、漁業、林業への体験活動を受け入れる体制づくりの整備
生産の喜びと、作物や自然の大切さの体験、その仕組みの整備
生産物に付加価値を付けるための情報収集、研究開発
生産物等の島内関連施設における販売促進
生産物の島内消費拡大を図る。関係機関との連携強化
農業関係者へ
漁業関係者へ
林業関係者へ

5.商工業への提案

観光や環境学習に関する機関・団体との連携強化や情報の収集、発信
特産品の研究・開発、紹介・提供
生産や加工過程を見学、体験できる受け入れ体制の整備
水力発電のエコツーリズムへの活用

6.民間団体への提案

エコツーリズムに関する新しい取り組みを推進するための民間団体の連携強化
伝統行事・伝統芸能など文化関係団体の活動内容の充実・活用
観光や環境学習関連施設との連携強化や情報の収集、発信
環境キップ制度や協力金制度のあり方等についての調査・研究
屋久島観光の方向性の確立と、その中で屋久島独自のエコツーリズム実現の位置付け

7.行政機関(国・県・町)への提案

屋久島観光の方向性の確立と、その中で屋久島独自のエコツーリズム実現の位置付け
エコツーリズムに関する研修等
行政機関が連携した自然観察会、環境学習等の充実
自然環境や伝統文化の調査研究と 情報提供
地域社会の方向と 学校教育のあり方
環境きつ制度や協力金制度のあり方についての調査・研究

活動分野ごとに求められる専門知識も必要で、この点はガイド事業者による知識・技術・経験の蓄積が望まれます。

財団では、'96年から人材養成セミナーを開催してきましたが、昨年度からは救急法など専門的で本格的なガイドセミナーを始めています。また、植物や地学、歴史や民俗学などを学ぶ屋久島研究講座と題した講座も始まり、ガイドの質をより高める取り組みが始まっています。この講座には島内で活躍するガイドだけでなく、観光業者や学校の教職員も参加するなど、非常に好評で、今年度も継続されています。また、今後は、屋久島独自のガイド登録・認定制度が検討されることになっています。

地域に根差したエコツーリズムに向けて

世界遺産への登録は、そこに住む人にとって、自然環境が守られるといったプラスの面ばかりではありません。観光客が増え、住民に対して自然環境保護への意識やごみ問題などにも厳しい目が注がれ、また、心ない観光客によって自然が破壊される恐れもあるのです。'89年度に17万人だった屋久島の入込客数は、'02年度に29万人になっており、例えば、コケで覆われていた推定樹齢2,000年の^{※2}ウィルソン株などは、観光客が触るためにコケが少なくなってしまったという被害が出ています。

先述したように山の奥へ、奥へと観光客を連れていくツアーガイドもいます。屋久島では集落の代表が山に宿る神に詣でる岳参りという習慣があるのですが、代表として参るのは、たくさんの人が山に入れば自然が壊れてしまうという発想もあったといいます。こうした事態を憂慮して、昔から地元で活動するガイド集団のなかには、最も人気のある日帰り縄文杉ツアーを行っていないところもあります。片道5時間もひたすら歩くために費やすだけでは屋久島

の自然を深く理解してもらうことはできないという考え方です。

屋久島への移動手段は飛行機と船に限られているため、その便数などによって観光入込数に一定の枠ができることもあり、現在は登山者の入込制限などは行っていませんが、今年度から入山者が利用する山小屋、登山道、トイレ等の維持管理費などに充てるため、入山者から環境保全推進協力金を収受することを検討しています。また、奥へ奥へと進むエコツアーを見直し、自然破壊を防ぐためにも、海や川など多彩な屋久島の自然を楽しんでもらう「里のエコツアー」を推奨しています。屋久島を訪れる観光客は縄文杉や白谷雲水峡など、どうしても知名度の高い観光名所に集中しがちです。しかし、屋久島には多様な自然と風土があり、これを生かして、人間の生活文化の視点から見えてくる自然を提供する風土ツアーのようなものが考えられないかということです。

「屋久島の環境文化は、島内にある24の集落の人々が守ってきた自然のなかで受け継がれてきました。しかし、エコツアーで自然が荒らされる心配が生じるようになって、来島者と集落の人たちとがどのように共生するのが重要になってきているのです」と、屋久島環境文化村センターで事業課長を務める日高益雄さんはいいます。里のエコツアーも農業や林業など、地元の人との接点のなかから生まれ



屋久島環境文化村センターには、上屋久町から日高課長（写真左）のほか、鹿児島県から和田博秀さん（写真右）ほか4名、屋久町から1名が派遣されている。

※2 ウィルソン株
屋久島最大の杉である縄文杉を見学するトレッキングルートにある巨大な切り株。アメリカの植物学者、アーネスト・H・ウィルソンによって世界に紹介されたことからこの名前が付いた。豊田秀吉が京都方広寺の大仏殿の建立に当たり、島津義久に命じて伐採させたという説があるが、定かではない。

てくるツアーを目指しているのです。

財団では、環境についての住民の理解を深めるために、'97年に環境省や森林管理署、県、町、教育委員会、NPO法人などで構成する「屋久島環境学習ネットワーク会議」を設置しています。

これは島内にある環境学習関連施設の有機的な連携を図り、環境学習プログラムの提供や施設の利用促進、情報交換を行うためのものです。各構成団体が観察会やお祭り、講座、自然体験セミナーなど、さまざまな事業メニューを用意しており、相互に協力しながら、地域住民への環境教育を行っています。事業メニューは80種ほどもあり、地元の小中学生や高校生を対象にしたものも少なくありません。今年度は島内で唯一の屋久島高等学校の環境学習コースの生徒を対象にした2泊3日の「屋久島高校環境学習」事業も始まります。日高事業課長は、「これから先は、特に環境教育を取り入れた子どもの活動が必要になってくると思います。山や川、海を見てきれいだなと思う心を育てていかなければ駄目だと思います」と、地域が一体となったエコツーリズムを推進するためには、小さなころからの環境教育が重要であることを実感しているようです。

財団では、このほか地域住民の理解を深めるため、地元で発行している季刊誌『生命の島』で各集落の

伝統文化などを紹介していたイラストマップの冊子を作成するなど、地域と共生するエコツーリズムを目指して、まずは地域住民の理解、参加を促す取り組みを進めています。

「エコツアーはボランティアでは成り立ちません。最終目的は地元にいる人たちが豊かに暮らすことです」と、エコツーリズムはガイドなど一部の観光業者だけがかわるものでないことを日高課長は指摘します。

地域が一体となってどのようにエコツーリズムを受け止めていくのか。また、その恩恵を多くの人々が実感できるには、どのような取り組み、仕組みが必要なのか。一方で、エコツーリストが増えることで、自然破壊の危険性が高まることも事実です。

屋久島へは移動手段が限られることもあって、観光客の平均宿泊数は2.8泊となっており、島内での消費は5万円以上、ガイドを伴う活動では、この活動に一人当たり13,000～16,000円と、消費単価も高くなっています。そういったこともあって、国内ではガイド業がしっかりと根付いている数少ない地域でもあります。

屋久島の経験から何を学ぶことができるのか。地域との共生という言葉に、これからのエコツーリズムの鍵があることを教えてください。



地元季刊誌『生命の島』に集落ごとに掲載されたイラストマップの一例。